関連学会印象記

アトランタで開催された第8回 Computers in Anesthesia 研究会に出席して

池田和之*

米国における麻酔科領域でのコンピュータ応用に関する研究会の組織は小生の知る限り4つがある．いずれも1981年度前後からスタートしたもので順不同に挙げると，1）Hewlett Packard 社のコンピュータシステムである PDMS (patient data management system) のユーザズ・クラブから発生した Society of Clinical Data Management が開催する会，2）TySmith（サンジェゴ）とPrakash（ロッテルダム）が主催する International Symposium in Monitoring and Computing，3）オハイオ大学が主催する Medical Technology Conference，4）バンダービルト大学が主催する Computing in anesthesia.

2）の会が1年半毎に開催するのに対して（米国とオランダで交互に），1），3），4）の会は米国内において毎年開催されている．今回，小生が出席したのは4）の会であって，これは米国麻酔学会（ASA meeting）に相前後して毎年開催される．会の名称が示すように取り上げるテーマは麻酔科的なものである点が特徴である．この会は1980年，アイオア大学麻酔科 Scamman が作ったものであるが2年前から事務局はバンダービルト大学麻酔科に移った．

さて本年の ASA meeting は米国ジョージア州アトランタ市で開催されたが，これに引続くようにして本会は10月14日～17日の間，アトランタ市の郊外のリゾート地ラニヤ湖畔で開かれた．毎回のことであるが出席者は100名足らずの小さな同好会である．日本から名大の小松，西脇両先生が出席された．またニューヨーク医大の渋谷教授も出席され興味ある発表をされた．この種の研究会の例に洩れず遊びのための時間もちゃんと取ってあるという会である．家族連れで来る人もあり，父親や旦那が meeting に出席して勉強している間は家族も充分に遊べる場所が与えられているという具合である．

発表の方はポスター（デモンストレーション）を含めて26題が出されていた．

その内容は麻酔チャート自動化と音声入力，患者モニタからのデータのシステム化（益々増えつつある患者モニタからのデータをいかに整理して，表示するか），麻酔シミュレーション，生体情報の解析（動脈圧変動など），エキスパートシステムの開発（capnogram，筋弛緩など），ネットワーク，データベース（患者管理，麻酔医管理など）などと多岐にわたり，この面でのアクティビティは我国よりもやや高いように見受けられた．

なかでも「展示」で目を引いたのは麻酔チャートの自動化のための努力である．生体情報はオンラインで入力し，その他の情報は音声入力と，これを補うためのタッチスクリーンと合計3つの入力方式で麻酔チャートを，筆記にたよることなく作り上げるものである．ここで音声入力だけに頼れないということは，とりも直さず現在はこの方式が未熟であるためだが，昨今のコンピュータ・テクノロジーの進歩の前には音声入力が確実な手段として遠からぬ将来に実現されるような感じを強くいだいた．

*浜松医科大学麻酔科

Presented by Medical*Online

次に注意を引いたのは麻酔シミュレーションである．麻酔研修医のトレーニングに対するコンピュータの応用例である．患者モデルを前にして研修医が現実に麻酔をかけている状況がシュミレータによって現出される．指導医が患者モデルに外乱を与えると，モニタ上に異常所見が現れるが，これに研修医がいかに対応するかということでトレーニングを行う意図のものである．

シミュレーションやエキスパートシステムなどは今後コンピュータの得意な分野として益々注目されて来るだろうという印象を強くいだいた次第である．

＊　＊　　＊　＊　　＊　＊

＊　＊　　＊　＊　　＊　＊

＊　＊　　＊　＊　　＊　＊

＊　＊　　＊　＊　　＊　＊

Presented by Medical*Online